

父の書斎

有島行光 他

解説 萩原葉子



筑摩叢書 334

筑摩叢書 334

父の書齋

有島行光 他
解説 萩原葉子



筑摩書房

父の書斎

筑摩叢書 334

1989年6月10日 初版第1刷発行

著 者 有 島 行 光 他

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株 式 筑 摩 書 房
会 社

東京都千代田区神田小川町2の8

郵便番号 101-91

電話 東京 (291) 7651番 (営業)

東京 (294) 6711番 (編集)

Printed in Japan

振替 東京 6-4123番

ISBN 4-480-01334-2 C 0095

厚德社・永興舎

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

「父の書齋」 目次

有島武郎……………	有島行光 三
石川千代松……………	石川欣一 一〇
巖谷小波……………	巖谷三一 一五
飯塚啓……………	飯塚浩二 二〇
入沢達吉……………	入沢文明 二七
内田魯庵……………	内田巖三 三三
上田敏……………	嘉治瑠璃子 四〇
上田万年……………	円地文子 四四

岡倉天心	小山内薫	大町桂月	厨川白村	佐佐木弘綱	沢柳政太郎	志賀重昂	島木赤彦	白鳥庫吉	田口卯吉	辰野金吾
.....										
岡倉一雄	小山内喬	大町文衛	厨川文夫	佐佐木信綱	沢柳礼次郎	志賀富士男	久保田健次	白鳥清	田口柳三郎	辰野隆三
三	五	七	九	一	三	五	七	九	一	三

三宅恒方	穂積陳重	広津柳浪	馬場孤蝶	芳賀矢一	夏目漱石	内藤湖南	戸川秋骨	寺尾寿	坪内逍遙	田中萃一郎
阿部艶子	市河晴子	広津和郎	馬場昂太郎	芳賀檀	夏目伸六	内藤乾吉	戸川エマ	寺尾新	坪内士行	田中荆三
六	三	一五	一五	一四	一四	一三	二三	三五	一九	二五

村井弦齋	村井米子
森鷗外	小堀杏奴
与謝野寛	森藤子

略歴及び執筆者紹介	一五
-----------	----

追補

丘浅次郎	丘直通
高浜虚子	星野立子
内田周平	内田亨

解説 父・朔太郎の書齋	萩原葉子
-------------	------

父
の
書
斎

有島武郎

有島行光

父は私が十三歳になった年に死んで了ったので、父の書齋に関する私の記憶も大変遠いものであり、物心ついてから十三歳迄の、即ち大正四、五年から十二年頃までの極く短い間の事になる。

その時分祖母と父と私達兄弟三人は、番町のかなり大きな家に住まっていた。亡くなった祖父の建てた家で、門を入ると表玄関の右手に、父が書齋にしていた二階建の洋館があった。これは家が出来上って了ってから後に、手狭だというので建て増した洋館だそうである。

志賀さんの『廿代一面』の中に「金曜日の夕方、彼は的もなく、赤坂の自家を出たが、散々迷った末に溜池から電車に乗って、四谷見附まで行き、其処から歩いて番町の伊作の家を訪ねた。武者長屋のやうな大きな門のくぐりを開けると、直ぐ前に丈の高い洋館があつて、その二階が伊作の部屋にな

つて居るのだが、灯がついてゐなかつた。彼は案内を乞はず、其儘出て了つた。」というところがある。この中の伊作が、父の弟で私には叔父になる里見弾の若い時らしいし、丈の高い洋館というのが、その後父が書斎とした前述の洋館なのである。

この時分、父は米国へ留学していたのであろう。

父の書斎は此の洋館の階下の奥の部屋であつた。旧式の西洋館で、内部も官舎のような感じがした。白塗りの壁、大きな扉、高い天井から下っている電灯。

それでも父が使っていた奥の部屋は、くすんだ濃紺のカーテンで覆われた書棚や、所狭いまでに置かれた長椅子、テーブル、蓄音機、ロダンの彫刻などで充実していたが、書斎へ通じる手前の応接間は実に古風其儘であつた。旧式なテーブルが中央に置かれ、マントルピースの上の壁には、床屋にあるような金縁の大鏡が掛けてあり、他には隅の方に小さなオルガンがある切りの殺風景さである。

殊に夜になると、当時の黄色味をおびた電灯の光で、益々明治時代的雰囲気が濃くなつた。

その為でもあろうか、夜の食事などを書斎の父へ知らせる役目を云いつかつたりして、その応接間を通らねばならぬとき、いつもヒヤツと冷いものを感じるような気がして、一息に駆け抜けては「パパ御飯」と書斎のドアへ取りついたものだ。

この「パパ御飯」では、随分人の悪い事をした思ひ出がある。父を訪ねた初対面の客などに、夕食

時になつても一向帰ろうとしない人が時々あつた。祖母と私の弟二人は、食卓について居乍ら、おあずけの形で父の来るのを待つていなければならぬ。行儀に喧しかった祖母は、父が箸を手にした中は、私達が先へ始める事は仲々許してくれない。私達にしても、一日中で最も楽しい夕食を父なしで始めるのもつまらなく、「まだかなあ」と待つてゐる。客の食事は用意してゐないのに、まさか女中をやつて父だけに食事を知らせる失礼な真似も出来ない。ところが或る時、私は待ち兼ねて来客中の父へ食事を知らせて了つた事があつた。客は早々に帰り父は直ぐ食堂へやつて来た。子供の事だから遠慮はない、何の憚るところもなくドアの外から「パパ御飯」とやつた訳である。客の方も相手が子供だから、腹も立てられまいし、又父にしても余りばつの悪い思いもせずに済んだらしい。それ以来屢々故意にこの手を用いるようになった。

祖母までがいたずらしい目顔で「それ、行さんパパ御飯をやつておいで」と催促する。勇躍私は中庭に添つた細長い廊下を走り、内玄関から左へ表玄関の畳廊下をつつ切り、其処から右へ日本間と洋館の境になつてゐる暗い板の間を飛ぶように駆け抜けて、応接間に踏み込むや大喝一声「パパ御飯」とやる。

「ハイ」と答える父の声を合図に、又しても一目散、飛んで帰つて息を切らして祖母に報告する。そして非常に英雄的な行為を成し遂げたような心持になつたものである。

夜食の後の団欒を程良く切上げて、「さあ、勉強」と一人書齋へ帰って行く父の姿を、何時も私はひそかに驚嘆に近い気持で見送った。

離れのような孤立した暗く淋しい洋館へ行く事がどうして恐ろしいかと思議だったし、私達が寝て了ってからも遅く迄、何故勉強をしなければならないのだらうと、子供心にどうも解らない事だったのである。

兎に角父の書齋は、私にとっては常に神秘的なものだった。祖母に育てられ、お居間と呼ばれていた祖母の居室が生活の中心だった私には、時たま父の書齋へ入ると凡て物珍しく、現在の私にすれば、恰度博物館へでも行つたような感じがしたのである。

父の留守に、私は一人書齋で英語の百科辞典の挿絵を眺めたり、机の上の重い皮張りの文鎮を持ち上げて見たり、恐る恐るガスの栓を捻ってちよつぱりガスを出して見たり、煙草入れから敷島を抜いて火はつけずに吸う真似をして見た事などが思い出される。

然し私は、誰もいないその書齋に長い時間居た事はなかった。暗く重々しく静まりかえっていながら、其処には目に見えぬ父の気魄が漲っているようであり、又耳に聴えぬ父の声に充たされているかのように思われて、私はそれに堪えられなくなり、明るい日本間の方へ戻って来て了つたものだ。

父を中心とした若い学生さん達の「草の葉会」と呼ぶ集りがあつた。恐らく月に何回の集りだった

のだろう。その夜は父の書齋が明るく活気を呈していた。応接間のテーブルには塩せんべいや果物が用意され、父の部屋からは元氣な若々しい話し声や、賑やかな笑声が洩れていた。それが何という事もなく私にも嬉しくて、訳もなく「草の葉会、草の葉会」と云ったのを憶えている。

或る晩、会の始まる迄の間、つまり父が講義にかかる迄の時間を、私は仲間入りをしていた事があった。

無論私は父に甘えながら、其処に交される雑談が解るような解らないような、あの子供独特の態度で仲間入りをしていた訳なのだが、その中に学生さんの一人が、何処だか遠足の好適地を熱心に父に語られて、其処へ是非お誘いしたい、行光さんも一緒に行かれる場所で、きつと喜ばれるでしょう、という意味の事を云われた。

私はそれが無性に嬉しく、祖母の部屋へ引下つて床に就いてからも、次の日にでも、其の何処かへ遠足へ行くような氣がして、愉しい期待で眠る事が出来なかった記憶がある。

どういう訳か、父の書齋を考える時、必ずこの時の光景が大変印象的に目に浮んで来る。それは光り輝く室内に、面を輝かした若い人達が笑っている、父も笑っている、そしてみんなが父を好いている、その幸福感で私は父に甘えている、こんな場面なのである。

「草の葉会」には学生時代の谷川徹三氏も居られたという事だ。先日能の会で私は初めて紹介に預つ

たが、谷川さんは私に歳を訊ねられ、私が「三十二になりました」とお答えすると「そうですかねえ」と非常に感慨深そうな面持をして居られた。

私が小学校の上級になっていた頃の事だったと思う。こんな事があった。

学校から帰った私は、一人で表玄関前の庭でフットボールをして遊んでいた。ところが思い切り高く蹴ったボールが、そのまま真直ぐに父の書斎の前にあつた井戸へ飛び込んだ了つた。直ぐに私は拾い上げる方法を思い浮べようとした。その時、驚くべき激しさで、書斎の窓が開いた。そして其処に植込みを通して、目を見開いた父の顔が覗いている。私は咄嗟には何の事か解らず、余り激しい父の勢に氣を吞まれてポカンとしていたが、父は私の顔を見ると表情を変えた。それは、子供が、はにかんだような表情だった。次の瞬間、私には凡てが解つた。父は私が井戸へ墜ちたと思つたのである。私の表情も見る見る甘いはにかみに硬ばって行くのが意識された。

私は急いでその場を離れた。ボールを拾い上げる竹竿を取つて来ると云つたように憶えている。

父のはにかんだような表情を、まともに見る事で收拾のつかなくなりそうな私自身を隠したかったからだ。

書斎にいる時、父は何時も静かに坐っていた。窓際に机を置き、植込みを通して来る淡い光の中で、やや眼を細めるようにしてじっと一所を見つめて考えている、それが書斎にいる父を思うとき、私の

頭に浮んで来る姿であつた。少くとも私には父は何時でもそうしているように思われたのである。その父のあのあわて方、私の胸は父をいとおしむ心で一ぱいになった。

……あれからもう二十年も経つて了つた。

今私は、三ツになる男の子の父親となつてゐる。父が私達兄弟に限りなく抱いていた愛情を私は自分の子が成長するに従い、ひしひしと身を以て感じるようになるだろう。

父の書齋だつた洋館は、現在やはり番町にあるが、父の死後、家を整理した時に、分割されてその二階建の洋間だけで一軒の借家になり、現在は「日本ビルマ協会」という看板が掛つてゐる。

父の代には、茶がかつた黄色のペンキ塗であつたが、今は白く塗り変えられ、明るい事務所となつて道路に面して建つてゐる。

蘭印が全面的に降伏した日、夜遅くその前を通つたら、二階の窓から「ラングーン陥落を祝す」と大書した白布が下げられていた。

石川千代松

石川欣一



夏の大掃除の前に、戸棚の整理をしていたら、古い写真が一枚出て来た。平家^{ひらや}の縁側に甲板椅子^{デツキチエヤ}を置き、洋服姿の父がそれにおさまっているものである。縁の下にアスパラガスの鉢がうつっている。



四谷区大番町十九番地——大木戸から神宮外苑へぬける丁度真中にあるこの土地を買って移ったのは僕が五つの時である。勿論引越当時のことなど、まるで知らぬが、あとから聞くと、その当時、何